

wh-節に先行する前置詞の随意性 — “have no idea” をめぐって —

成 田 圭 市

1. はじめに

名詞・形容詞・動詞の補部としてwh-節が生じるとき、以下に示すように前置詞が省略されることがある。¹⁾

- (1) a. You can have no idea (of) how anxious we have been.
 b. We have solved the problem (of) who was at fault.
 c. I'm not sure (about) what to do.
 d. We may be late — it depends (on) how much traffic there is.

一方、普通の名詞句が同じ位置に現れるときにはこの前置詞は義務的であり、省略されることはない。

- (2) a. The government claimed to have solved the problem of unemployment.
 b. *The government claimed to have solved the problem unemployment.
 (3) a. I'm not sure about the sum.
 b. *I'm not sure the sum.
 (4) a. It all depends on the weather.
 b. *It all depends the weather.

機能的にはともに名詞の働きをする要素であるにもかかわらず、なぜwh-節の場合には前置詞が随意的なのであろうか。前置詞の出没には何らかの条件が課せられているのか。また、前置詞の有無が何らかの意味の違いを生み出しているのではあろうか。本論では、これらの点について、現代英語の大規模コーパス・コーパスを用いて計量的な調査を行うとともに、いくつかの関連する事象についても論考を加える。

なお、本論でいうwh-節とは、wh-wordであるwhat, who, when, where, why, how, whether, which, ifに導かれた関係疑問節と関係感嘆節のことである。名詞的機能を果たすwh-節としては、この他にwhat(ever)に導かれる自由関係詞節 (free relative clause) もあるが、これは先行詞を含む関係詞節であり、名詞節というよりもむしろ名詞句と扱い得るものである (cf. Greenbaum 1996: 590)。このため、普通の名詞と同様、先行する前置詞を省略することはできない。

- (5) a. I was ashamed *(of) what I had done.
 b. I'm really fond *(of) what she wrote.
 c. I entirely agree *(with) what you say.
 d. They seem pleased *(with) what I gave them.

では、まず始めに、wh-節の直前の前置詞の省略現象に関して語法書・文法書の説くところを概略しておこう。Quirk et al. (1985, p.1052, p.1184, p.1215, p.1225) では、wh-節の前で前置詞は随意的に省略されると説明され、次のような例が挙げられている。

- (6) a. We have solved the problem (of) who was at fault.
 b. I inquired (about) whether the tickets were ready.
 c. They haven't yet decided (on) which flight they will take.
 d. Jim was reluctant to inform us (of) where he got the money.
 e. Would you remind me (about) how we start the engine?
 f. I was unsure (of, about) whether the problem was solved.
 g. John is careful (about) what he does with his money.
 h. Are you sure (of) how much the machine costs?

前置詞の有無は随意であり、あってもなくてもそこに差がないということになる。ただし、次のように若干の意味の違いが生じる場合もあると付記されている (p.1185)。

- (7) a. She asked what he wanted.
 b. She asked about what he wanted.

例文 (7a) は彼女がした質問をそのまま伝えているのに対し、(7b) は彼女がした質問そのものを表しているのではなく、彼女がした質問の話題を述べているだけである。Quirk et al. では触れられていないが、これはちょうど以下の対比と平行なものである。

- (8) a. She asked the price.
 b. She asked about the price.

現代英語の語法書として定評のあるSwan (1995) も同様に、接続詞の前では時に前置詞が省略され (p.444)、とりわけ間接疑問節の前では前置詞の省略が普通である (p.456) と述べている

- (9) a. I'm not certain (of) what I'm supposed to do.
 b. The question (of) whether they should turn back was never discussed.
 c. Tell me (about) where you went.
 d. I asked her (about) whether she believed in God.
 e. We may be late — it depends (on) how much traffic there is.
 f. I'm not sure (of) how he does it.

前置詞の省略が不自然あるいは不可のこともあるとして以下の例を挙げているが、その理由は説明されていない。

- (10) a. I'm worried about where she is.
 b. The police questioned me about what I'd seen.
 c. There's the question of who's going to pay.

このうちbe worried about / worry aboutに関しては、前置詞が省略された実例がコーパスにも数例見られるし、最近では『ハリー・ポッター』第5巻でも、前置詞が省略されたものとされないものが共存している (例文11)。

- (11) a. If I wasn't worried what would happen to you students without me, I'd resign in protest.
 b. They're going to be more worried about what Dementors were doing floating around Wisteria Walk.

また、「wh-節の前ではaboutは省略可」として以下の例を挙げている辞書すらある（『ジーニアス大英和辞典』）。Swanの判断に関しては、個人差もあるのであろう。

- (12) We worried (about) whether the lecturer would arrive in time.

最新の包括的文法書であるHuddleston & Pullum (2002) も同じく、以下のような例を挙げて、前置詞が随意的なこともあるとの説明を与えている。

- (13) a. They can't agree (about / as to / on) who is the best person for the job.
 b. I'm not certain (about / as to / of) what she's asking for.
 c. He ignores the question (as to / of) whether the commissioner was impartial.

しかし一方では、前置詞が省略できない場合も多いことや (14a, b), たいがいの形容詞では前置詞を用いる方が好まれるが、sureのみは前置詞なしが普通であること (14c) なども指摘している。

- (14) a. He is anxious about whether he should accept their offer or not.
 b. I overheard their discussion on how to combat tax-avoidance.
 c. I'm not sure why you are complaining.

コーパス分析の結果に基づいて記述されたBiber et al. (1999: 656) は、名詞の補部としてwh-節が続く場合、of+wh-節の方が前置詞なしのものよりも普通であり、特にNEWSとACADのジャンルではその傾向が強いと述べている。ただ、残念ながら、さらに立ち入って前置詞の有無を計量的に分析するまでには至っていない。

2. 名詞性と節性

普通の名詞句の場合には前置詞が必須となる環境で、同じく名詞的機能を果たすwh-節の場合には前置詞が随意的であるのは、Ross (1973) の「名詞性」(nouniness) と大きく関連している。

同じ名詞といっても、その統語的な具現化はさまざまであり、例えば以下の5種類の「名詞表現」はいずれも統語的には名詞の機能を果たすが、これらの名詞句や名詞節がみな等しく名詞の性質を示すわけではない。

- (1) a. that節: That he has nothing to do with it is quite obvious.
 b. for ... to: For you to behave like that was a shame.
 c. wh-節: When he will return is not known.
 d. ~ing: John's being there was a help to me.
 e. 名詞: The fact is known to everyone.

それらの有する「名詞らしさ」について、次のような階層関係が成り立つと考えられるのである (Ross 1973)。なお、Rossでは行為名詞化形 (action nominal) や派生名詞化形 (derived nominal) など、さらに細かい分類がなされているが、ここでは便宜上簡略化した階層を示す。

- (2) that節<for ... to<wh-節<~ing<名詞
 「節的」 ←————→ 「名詞的」

この階層で右に行けば行くほど「名詞らしさ」の度合いが高くなり、逆に左に行くほど「節らしさ」の度合いが高くなる。内部に主語+（定形）動詞を有するものの方が「節性」が高いと判断されるのは当然であろう。

Rossは、こうした「名詞性」がさまざまな統語事象に反映されていることを例証したが、その一つが、本論で問題にしている補部の前での前置詞省略である。以下の例から明らかなように、節らしさが高いほど前置詞の省略は義務的となる。

- (3) I was surprised
 (*at) that you had hives.
 (*at) to find myself underwater.
 (at) how far I could throw the ball.
 at jim('s) doing that.
 at the news.

本論では便宜上「wh-節」の中に以下の二通りの構造を含めているが、

- (4) a. I don't know what I should do.
 b. I don't know what to do.

この(4b)のような「wh-to不定詞」の構造は、上の「名詞性」の階層内の位置付けが明確でない。「for ... to」と「wh-節」の両方の性質を兼ね備えていると考えれば、その中間の位置に置くこともできようが、前置詞の省略という観点から見た場合には、ほぼ「wh-節」と同様の統語的振舞いを示している。

- (5) a. I have no idea (of) what I should do.
 b. I have no idea (of) what to do.

上例(3)が示すように、名詞性が高まれば前置詞の必要性がそれに比例して高まるわけだが、では、wh-to不定詞とwh-節とでは、そこに微妙な名詞性の度合いの違いがあるのだろうか。4.2.2節で分析する“have no idea”とその類似表現のデータを基にして、前置詞の有無の頻度を比べてみると、以下のような結果が得られる。(what, where, how以外のwh-wordについては、データの絶対数が少ないため数量分析は割愛した。)

have no idea (of) what ... (総計893例)

前置詞無524例：what-節498例 (95%) what-to不定詞26例 (5%)

前置詞有369例：what-節347例 (94%) what-to不定詞22例 (6%)

have no idea (of) where ... (総計170例)

前置詞無140例：where-節130例 (93%) where-to不定詞10例 (7%)

前置詞有30例：where-節27例 (90%) where-to不定詞3例 (10%)

have no idea (of) how ... (総計501例)

前置詞無300例：how-節236例 (78.7%) how-to不定詞64例 (21.3%)

前置詞有201例：how-節166例 (82.6%) how-to不定詞35例 (17.4%)

もし上の(2)の階層においてwh-to不定詞よりもwh-節の方が名詞性が高いとするなら、「前置詞無」ではwh-to不定詞の頻度が相対的に高まり、一方「前置詞有」ではwh-節の頻度が相対的に高まると考えられる。しかしこの数値を見る限り、そこに有意な差はないようであり、従って、前置詞の省略に関していえば、この両者の名詞性を区別する必要はなく、「wh-節」として一まとめにしてよいと思われる。なお、what to ...とwhere to ...に比してhow to ...の頻度がやや高いのは、慣用表現としての使用頻度の高さの印として注目に値する。

3. 形式と意味のずれ

既に見たように、前置詞+wh-節では随意的に前置詞が省略されるが、同じ環境に前置詞+名詞句が生じている場合、この前置詞を省略することはできない。

- (1) a. We have solved the problem of unemployment.
 b. *We have solved the problem unemployment.
 (2) a. I'm not sure about the sum.
 b. *I'm not sure the sum.

ところが、一見すると全く同じ形式でありながら、前置詞の省略が許容される例が存在する。

- (3) a. You've no idea the problems it causes. (*Times*)
 b. I had no idea the furor this would cause. (*Time*)
 c. You've no idea the harm that it did me. (C. Doyle)
 d. My dear friends, you've no idea the trouble these rascals will go to to imitate the hard beautiful bronze-like appearance of genuine patina. (R. Dahl)

いずれも関係節を伴った名詞句 (the problems, the furor, the harm, the trouble) がideaという名詞に直接後続している形であり、本来なら前置詞のofが当然要求される場所である。

これは、形の上では「先行詞+関係節」という名詞句ながら、意味的には間接疑問節（あるいは間接感嘆節）に近い構文であり、潜在疑問文 (concealed question) として知られているものである。以下の例文(4a)では、the street that he lived onは「彼が住んでいる通り」の意味であり、「先行詞+関係節」からなる単なる名詞句である。一方(4b)も「彼が住んでいる通り(を教えてくれた)」と訳しても一応意味は通るが、「彼がどんな通りに住んでいるのか」と疑問節的に訳した方がはるかに理解しやすいし、原文の意図された意味にも近い。(5b)も同様であり、(4b)や(5b)のイタリック体の部分が潜在疑問文である。

- (4) a. They avoided *the street that he lived on*.
 b. He told me *the street that he lived on*. ('which street he lived on')
 (5) a. They disliked *the man that I invited*.
 b. They never found *the man that I invited*. ('which man I invited')

同じ形式であっても、(4a)や(5a)のイタリック部分は単なる関係節を含む名詞句であって疑問の意味はない。avoid, dislikeなどは間接疑問節を取らない動詞だからである。

潜在疑問は形の上では「先行詞+関係節」という名詞句であるが、意味的には疑問文の意味を含み、統語的にも名詞句ではなくむしろ文に近い振舞いをする。例えば、単なる名詞句の場合には(6a)のように関係節を省略した形も可能だが、潜在疑問では関係節を省略した形は(6b)のように非文法的文となる。

- (6) a. They avoided the street.

b. *He told me the street.

また、(7)のような形式主語のItを用いたいわゆる仮主語の構文で、名詞句を外置した(8)のようなものは非文となるが、(9)や(10)のようにその名詞句が潜在疑問と解されると外置が可能になる。普通の名詞句でありながら、「節的」な性質が高まっているからである。

- (7) It was a shame that Holmes failed to solve the case. (←That Holmes failed to solve the case was a shame.)
 (8) *It circulated a rumor that he was secretly engaged. (←A rumor that he was secretly engaged circulated.)
 (9) It was amazing the number of times she got it right. (“how many times …”)
 (10) It is astonishing the amount of trouble which some people will take with no object save a mystification. (“how much trouble some people will take …”) (C. Doyle)

さて、冒頭の例に戻ると、これらにおいて前置詞が省略されているのは、まさに名詞句の部分が潜在疑問であり、節的な性質を帯びているからに他ならない。

- (11) a. You've no idea the problems it causes. (*Times*)
 b. I had no idea the furor this would cause. (*Time*)
 c. You've no idea the harm that it did me. (C. Doyle)
 d. You've no idea the trouble I had to get him in. (C. Doyle)
 e. You've no idea the kind of people I'm traveling with. (D.G. Phillips)
 f. My dear friends, you've no idea the trouble these rascals will go to to imitate the hard beautiful bronze-like appearance of genuine patina. (R. Dahl)

いずれも次のようにパラフレーズされよう。

- (12) a. You've no idea what problems it causes.
 b. I had no idea what furor this would cause.
 c. You've no idea what harm it did me.
 d. You've no idea what trouble I had to get him in.
 e. You've no idea what kind of people I'm traveling with.
 f. You've no idea what trouble these rascals will go to to imitate the hard beautiful bronze-like appearance of genuine patina.

have no ideaの後に名詞句が続く場合には、通例You have no idea of my anxiety.のようにofが生じるのに対し、You have no idea how anxious I am.のように節が後続するとofが省略される。(11)の各例文で、「名詞+関係節」という名詞句が続いているにもかかわらずofが省略されている点からも、これが意味の上で間接疑問節的に機能していることがわかる。以下の諸例でも、最初の2例では普通の名詞が補部にくる場合には前置詞が必要とされるものである。また、3番目の例は間接感嘆節と名詞句が等位接続されている点が破格だが、名詞句が潜在疑問文として間接感嘆節の解釈を与えられるため、等位接続が可能になっているわけである。

- (13) When the offer was first made I little thought the turn which events would take. (“what turn events would take”) (C. Doyle)
 Cf. I never thought of the danger.

- (14) I little dreamed the strange shape which that campaign was destined to take. ("what strange shape that campaign was destined to take") (C. Doyle)
Cf. I wouldn't dream of such a thing.
- (15) That will show you how fond he was of me, Mr. Holmes, and the little things that he would think of. ("what little things he would think of") (C. Doyle)

4. "have no idea" をめぐって

4. 1. 中核形と周辺形

具体的なコーパス分析の対象として、本節では“have no idea”（及びその変異形）の後にwh-節が続く構造を取り上げてみたい。普通の名詞句が後続する場合には、上述した潜在疑問文の場合を除けば、前置詞が必須であるが、wh-節が後続する場合には、ofは随意的要素となる。（以下、本論で引用する例文は全て、特別の断りがない限り、British National Corpus²⁾からの引用である。ただし、スペースの関係で適当に前後の文脈を端折っている場合がある。）

- (1) a. I have no idea how long it lasted.
b. She had no idea where they were going.
c. He had no idea what to do.
Cf. I had no idea of the situation.
I haven't the slightest idea about the plan.

この“idea”は主に否定的な文脈（否定文・疑問文）で用いられて「知識、理解；見当、心当たり」の意味を表すものであり，“have no idea”の形式をとるのが普通である。意味的には“not know”と等しく解釈され、また“know”と同じ種類の補文を従えることができる（Huddleston & Pullum 2002: 274）。次例の対比から明らかなように、肯定的な文脈では許容されないこともある。

- (2) a. He had no idea how ill I was.
b. *He had a rather novel idea how ill I was. (Huddleston & Pullum 2002)

これらの例で、ideaに後続するwh-節をいわゆる「同格節」と見なす分析が従来行われてきているが、次の例からわかるように、同格節と考えることはできない。同格節ならば(3)の例文も当然許容されるはずだからである。

- (3) a. *The idea how ill I was hadn't entered his mind.
b. *A good idea what to do was suggested by Terry.

実際にコーパスを用いてこの構文を検索してみると、「have no idea + wh-節」という基本的なパターンの他にも、さまざまな変異形が用いられているのがわかる。“have no idea”は“know”の意味を表す慣用句 (idiom) と捉えられるが、慣用句としての凍結性 (frozenness) はそれほど高くないため、慣用句の形に若干の変化を許容するのである。³⁾ その典型的なものをいくつかBNCから引用してみよう。まず最初は、否定ではなく肯定形で使われている実例である。これらの例の“have an idea”は問題なく“know”で置き換えることができよう。

- (4) a. Everybody had an idea where they were.
b. I've got an idea what might be wrong.
c. We now have a better idea how to control these animals.

コーパスデータの大多数は“have no idea”あるいは“not have any idea”という否定形か、あるいは疑問文であり、文法書などの「主に否定文・疑問文で」という但し書きは確かにその通りなのであるが、肯定の文脈でも少数ながら用いられている点を忘れてはならない。

次に、have以外の動詞が用いられている実例を見てみよう。

- (5) a. You *get* a better idea why we haven't done so well.
 b. We want to *get* an idea of what's going on in the rain forest canopy.
 c. It is possible to *gain* an idea of how parkland has changed over the years.
 d. You may *form* some idea what progress I have made in different studies.
 e. Awareness of environment may *give* at least some idea if it is quiet or not.
 f. Just *give* us an idea where you want to begin.
 g. Can you *give* us any idea how long the rescue will take?

get, gain, formなどはいずれもhaveに準ずる意味と解釈できるだろう。一方give an ideaの場合には、「知識を与える」という意味から「教える」「わからせる」といった意味が派生されると考えられる。have以外では、getとgiveが大多数だが、少数ながらgain, provide, form, offer, obtain等々の動詞が使われた用例がコーパス内に散見する。

さらに、ideaに修飾語が付与されている例にも着目したい。基本的な形式はhave no ideaあるいはnot have any ideaであり、通例はideaに何も修飾語が付かないが、「さっぱりわからない」というふうに否定を強調する場合にslightest, foggiest, vaguestなどの最上級が強調語としてideaの前に置かれることがある。「ぼんやりした、おぼろな」の意味の形容詞の最上級を否定することで、理解度が限りなくゼロに近いことが強調されるのである。

- (6) a. He still has not the *faintest* idea where he is going.
 b. I haven't got the *faintest bloody* idea what you're talking about.
 c. She hadn't the *foggiest* idea what they were shouting.
 d. Employers often had only the *haziest* idea of what production-norms to set.
 e. I have not the *remotest* idea what you mean.
 f. She was too introverted and frigid to have the *vaguest* idea how to find the pleasures of life.

「はっきりとはわからない」「正確にはわからない」のように理解度に何らかの留保を付け加える場合にも、ideaの前に修飾語が付加される。

- (7) a. Rain had no *clear* idea what to do with her.
 b. He had no *precise* idea where Adam was.
 c. I have no *exact* idea how many times he hit me.
 d. Nobody has any *real* idea how long they will last.

慣用句の基本形からの変化がさらに進むと、肯定形であってもideaに修飾語が付くようになる。この場合にもやはり理解度に何らかの留保を付与する役割を果たす。

- (8) a. You've a pretty *good* idea what's inside.
 b. We now have a *better* idea how to control these animals.
 c. She had a *fair* idea who they were from.
 d. But I've got a *rough* idea where it'll go anyway.
 e. They had a *vague* idea where the place was.

f. Many managers have only a *general* idea of how they want to improve.

Huddleston & Pullum (2002) が非文として挙げている次例は, *novel* という理解度とはあまり関係のない形容詞が用いられているので容認不可能になっていると考えられる。

(9) *He had a rather novel idea how ill I was.

以上, いずれも, 「have no idea + wh-節」という成句の中核的な構造から派生された周辺的な変異形であるが, 基本的な統語的特徴と意味的特長は保持していることに注目したい。

4. 2. ofの随意性の計量分析

八木 (1996: 169) は, 「have no idea (of) + wh-節」について, 「前置詞の有無が意味の違いを生み出しているとは考えにくく, 単なる異形としてよいと思う」と指摘しているが, 果たして「単なる異形」で片付けてよいものであろうか。一見したところ, 前置詞の有無がはっきりとした意味の違いと結びついていると考えられないのは確かだが, 他方では, 前置詞を用いるか用いないかの選択には何らかの条件が絡んでいるはずである。本節では, 前置詞の出没に関わる要因を, コーパスデータの計量的分析により探してみたい。

BNCの検索の結果得られたwh-節を伴うhave no idea及びその変異形の総数は1848例であり⁴⁾, 内訳は, ofのないものが1220例 (66%), ofのあるものが628例 (34%) である。それぞれのwh-wordごとの内訳は【表1】の通り。

【表1】

	ofなし	ofあり	計
what	524 (58.7%)	369 (42.3%)	893
how	299 (61.3%)	189 (38.7%)	488
where	139 (82.7%)	29 (17.3%)	168
who	92 (92%)	8 (8%)	100
why	76 (89.4%)	9 (10.6%)	85
whether	33 (89.2%)	4 (10.8%)	37
when	24 (70.6%)	10 (29.4%)	34
which	12 (54.5%)	10 (45.5%)	22
if	21 (100%)	0 (0%)	21

whether, when, whichなどは絶対数が少ないので確言はできないが, what, howの場合に前置詞なしの割合が相対的に低い点に注目したい。個々のwh-wordに応じて前置詞の有無が異なるという可能性が考えられるからであり, この点は今回は調査できなかったが, 今後, have no idea以外の表現での前置詞の有無を計量的に調査することにより, 解明したい。

これらのデータを計量的に分析してみて, まず第一に明らかになったのは, have no ideaという基本形と, その肯定の変異形have an ideaとの間の明らかな差である。whatが後続する例893例についてその内訳を見ると, 否定文ではofのないもの478例 (80.7%), ofのあるもの114例 (19.3%) であるのに対し, 肯定文ではofのないもの46例 (15.3%), ofのあるもの255例 (84.7%) となり, その割合が見事に逆転しているのである。他のwh-wordではこれほどに大きな差は見られないが, 全てのデータに関して否定文脈対肯定文脈とofの有無との関連を計算すると【表2】のようになる。

【表2】

	否 定	肯 定	計
of なし	734 (60.2%)	486 (39.8%)	1220
of あり	208 (33.1%)	420 (66.9%)	628

また、否定文と肯定文のそれぞれでofのない例とofのある例とが、どのくらいの頻度で分布しているかを示すのが次の【表3】である。【表2】と【表3】の数値データから明らかなように、否定的な文脈で用いられた場合に前置詞の随意性が相対的に高まるわけである。慣用句としての“have no idea”の基本形が否定文であるから、これは当然のことといえよう。

【表3】

	of なし	of あり	計
否 定	734 (77.9%)	208 (22.1%)	942
肯 定	486 (53.6%)	420 (46.4%)	906
全 体	1220 (66%)	628 (34%)	1848

次に、have a clear ideaのようにideaに修飾語が付されたケースを見てみよう。⁵⁾ “have no idea”は全体がひとまとまりの慣用句として“not know”の意味を表しており、ideaの名詞としての独立性は低いと考えられる。そのため、have no ideaの後に前置詞を介さずに直接wh-節が続くことができるのである。何らかの修飾語を付加するというのは、いわばideaの名詞としての独立性を高めることになり、そのため、前置詞の必要性もそれに応じて高まると思われる。BNCのデータを分析したところ、まさにこれを裏付ける結果が得られた。

【表4】

	of なし	of あり	計
修飾語あり	69 (21.1%)	258 (78.9%)	327
修飾語なし	1151 (75.7%)	370 (24.3%)	1521

さらに、“have no idea”という基本形からの変異形としてhave以外の動詞が使われた例を上で見したが、これもまた、ofの出現と相関関係があるように思われる。“have no idea”というひとまとまりの慣用句から若干逸脱しているが故に、ideaの名詞としての独立性が相対的に高まり、その結果、前置詞の必要性も高まるのであろう。BNCデータの分析の結果は【表5】の通りである。

【表5】

	of なし	of あり	計
have	1198 (75.5%)	388 (24.5%)	1586
have 以外	22 (8.4%)	240 (91.6%)	262

以上見てきた三つの条件の全てを満たしている場合には、きわめて高い確率でofが出現すると予想されるし、実際、BNCのデータを眺めた限り、ofのないパターンでこの三つの条件を全て満たしているものは見当たらなかった。すなわち、“have no idea”及びその変異形がwh-節を伴う構文には、「have no idea + wh-節」という基本的な形式(a)と、その対極に位置しofがほぼ必須な形式(b)との両極端があり、その間にはさまざまな連続変異形(cline)があつて、ofの出没を規定しているのである。

- (10) a. I have no idea what you're talking about.
 b. The present-day breeding habits of some birds give us a reasonably good idea of how polyandry evolved.

5. おわりに

本論では、前置詞+wh-節という構造における前置詞の出没を取り上げて、従来の研究を概観しつつ問題を指摘するとともに、ケーススタディとして“have no idea”という慣用句を取り上げ、大規模コンピュータ・コーパスにより計量的な分析を行い、前置詞の有無に作用する諸要因を探った。

「have no idea (of)+wh-節」におけるofの出没に関わる要因としては、(1)否定文脈対肯定文脈、(2)ideaの独立性、(3)動詞の種類(have対それ以外の動詞)が、それぞれ相互に作用しながら、ofの出没に影響を与えていることが示された。

本論で扱うことのできなかつた点としては、wh-節の内部構造及び意味内容、wh-wordごとにそれぞれ固有の特質、前置詞ごとに固有の特質、基本的構造と派生的構造、などのさらに微妙かつ複雑な諸要因と前置詞の有無との関連が挙げられる。これら残された点に関しても、今後大規模コーパスを援用してデータ分析を進めることにより、解明を試みるつもりである。

注

- 動詞によっては、wh-節が後続する場合に前置詞を取らないのが普通のものもある。以下の対比を参照のこと(Hornby 1975: 32)。
 A: I wonder why Jane hasn't come.
 B: I was wondering about that, too.
- 本論で分析対象としているBritish National Corpus (BNC) は、Oxford University Press, Longman, Chambers Harrap, Oxford University Computing Services, Lancaster University及びBritish Libraryが共同で作成した現代イギリス英語の大規模コンピュータ・コーパスである。データの総量は約1億語からなり、そのうちの1割が話し言葉で残りの9割が書き言葉である。本論執筆に際しては、2000年12月発行の“BNC World Edition”(the Humanities Computing Unit of Oxford University)を用いた。
- 例えば“kick the bucket”(「死ぬ」)はかなり凍結度が進んだ慣用句と考えられる。この意味で受身形(The bucket was kicked by John.)にすることはできないし、また「大往生する」の意味で*kick the big bucketというように修飾語を付加することもできないからである。
- 実際にはもっと多数の例が出てくるが、形式的には「have no idea (of)+wh-節」であっても、wh-節が関係疑問節ないし関係感嘆節でないものは極力排除した。
- ここでの修飾語には、否定を強調するfaintest, slightestなどは含まれない。これらはat all, whateverなどと同様に否定表現の一部であり、ideaの名詞としての独立性を高めるものとは必ずしもいえないからである。

参考文献

- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Greenbaum, S. 1996. *The Oxford English Grammar*. Oxford U.P.
- Hornby, A.S. 1975. *Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford U.P.
- Huddleston, R. & G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge U.P.
- 村田勇二郎・成田圭市. 1996. 英語の文法. 大修館.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Ross, J.R. 1973. Nouniness. Fujimura, O. ed., *Three Dimensions of Linguistic Theory*: 137-257. TEC.
- Swan, M. 1995. *Practical English Usage*. O.U.P.
- 八木克正. 1996. ネイティブの直観にせまる語法研究. 研究社.